Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　72　pp. 31 ～ 35　2017

相対主義と相対化主義

立　花　希　一

Relativism and Relativizationism

TACHIBANA, Kiichi

Abstract

There are at least two views on what relativism is. One is a view that relativism is a position that claims any positions are equally wrong or equally false as well as equally right or equally true. Another is a view that relativism is not the position that claims any positions are equally wrong or equally false but a position that claims any positions are equally right or equally true. This paper critically examines the two views and concludes the latter is a more proper concept of relativism according to critical rationalism, and the position that claims *any positions are equally wrong or equally false* is not relativism but relativizationism, which is compatible with criticism in Popper's sense.

キーワード：相対主義，（肯定的 / 否定的）絶対主義，絶対化主義，相対化主義，批判主義
Key words : relativism, (positive/negative) absolutism, absolutizationism, relativizationism, criticism

Ⅰ.

小河原誠氏は，『批判的合理主義研究』に掲載された「いわゆる報道の中立性・公平性について ――両論併記主義を超える途――[1]」の中で，相対主義について，次のように述べている[2]。

> 意見が異なっているにもかかわらず両方ともただしいという典型的な相対主義が意味されているときと，それとは正反対にどちらも間違っているという・いわば負の相対主義が意味されているときがある。

この箇所の「どちらも間違っているという・いわば負の相対主義が意味されているときがある」という発言に対しても，私は次のようなコメントをかれに送っていた[3]。すなわち，

> これは，相対主義でしょうか？それぞれの間違いを指摘することが可能なので，相対化主義では？内在的批判，背理法の適用がまさにできる立場になりうると思います。

しかしながら，今回，掲載された論考では，この箇所は一字一句変更されていなかった。したがって，氏は，この箇所の主張をあくまでも正しいと判断されたのだと思われる。唯一の真なる本質的定義が存在すれば別だが，そうでなければ，定義は目的に応じて複数存在するので，相対主義の定義を氏のように定義することもまったく自由である。すなわち，意見が異なっている場合，どちらも正しいとする立場と，どちらも間違っているとする立場の両方とも相対主義であると。しかしながら，論考の趣旨からわかるように，相対主義に陥らず，意見の間違いを内在的に批判することの重要性を訴えることで，両

1　氏の論考の注1.で，「改訂にあたり，立花希一氏から若干のコメントをいただいたことに感謝申し上げる」という丁寧な謝辞があり，しかも，それに基づいて加筆・修正された箇所が実際にいくつもあるので，コメントさせていただいた者としては光栄である。また，ひじょうに有意義なやりとりができたこと，さらには私の意見を受容してくださったことに対して，氏に敬意を表する次第である。しかしながら，私のコメントの中でもっとも重要だと私がみなした指摘については，残念ながら，変更はまったく加えられていなかった。しかし，この点が，相対主義と批判主義・相対化主義を区別するうえできわめて重要なことだと思われるので，ここであえて筆をとらせていただいた。

2　小河原誠，「いわゆる報道の中立性・公平性について ――両論併記主義を超える途――」，『批判的合理主義研究』，Vol. 8, No.1（通巻 38 号），2016 年 7 月，10 ページ。

3　E-mail, From: Kiichi TACHIBANA, Sunday, July 10, 2016 5:13 PM, To: Makoto KOGAWARA ; 昌司 小柳 ; 昌司 小柳, Subject: Re: 原稿送付，添付ファイル，２ページ，コメント [KT4]。

Akita University

論併記主義を克服しようとしている氏の目的からすれば，どちらも間違っているとする立場は，むしろ異なる意見の双方の間違いを内在的に批判することを可能にするものになっているので，どちらも正しいとして，そのような内在的批判を不可能にするような相対主義の立場とは決定的に相違している立場といえるのではないだろうか。

英文の拙稿，Tolerant Rationalism で，相対主義を若干，考察したことがあるが，そこで，私は次のように述べた[4]。

> I call relativism a position that claims that any positions are equally right or equally true. According to relativism, there is no room for modifications and/or improvements. For the truth cannot be made more true when all positions are equally true.
>
> On the other hand, tolerant critical rationalism does not claim that all positions are equally right or equally true (though all positions may be equally wrong or equally false). Critical rationalism requires criticism for modifications and/or improvements to take place. I trust that this clarifies the distinction between critical rationalism and relativism.

翻訳すると，

> どんな立場も同様に正しいあるいは同様に真であると主張する立場を相対主義と呼ぶ。相対主義によれば，修正や改善の余地はない。なぜならすべての立場が同様に真である場合，その真理をよりいっそう真にすることはありえないからである。
>
> 他方，寛容な批判的合理主義は，すべての立場が同様に正しいとか同様に真であるとは主張しない（すべての立場が同様に誤っていたり同様に偽であったりするかもしれないとしても）。批判的合理主義は，修正や改善のために批判が行われることを要求する。以上のことから，批判的合理主義と相対主義との相違は明確になったのではないかと思う。

混同されがちな以下の用語を明確に区別する必要があるのではないかと思われる。

（1）絶対主義（absolutism）：絶対的真理の存在の肯定
　1）肯定的絶対主義（positive absolutism）：絶対的真理を獲得しているという立場
　2）否定的絶対主義（negative absolutism）：理念としての真理を探究する立場
（2）相対主義（relativism）：絶対主義を否定し，相互に異なる見解が（それぞれの社会，文化，歴史において）正しいとみなす立場。因みに，個別の見解を（それぞれの社会，文化，歴史において）正しいものとして，それを絶対化する絶対化主義（absolutizationism）でもある。局所的絶対主義（local absolutism）とも呼びうる。相対主義によれば，修正や改善の余地はない。

他方，相互に異なる見解が（それぞれの社会，文化，歴史において）間違っているとみなす立場は相対主義ではなく，（次に述べる）相対化主義である（どんな見解も誤りがあれば，修正・改善をめざすからである）。

（3）相対化主義（relativizationism）：何ものも絶対化せず，自分の見解も含めた多様な見解を相対化し，誤りがあれば修正・改善することによって，より正しい見解を探究していこうとする立場。相対主義と同様，肯定的絶対主義は否定するが，相対主義とは異なり，絶対化主義・局所的絶対主義ではなく，他方，理念としての真理を探究する（否定的）絶対主義は否定しない立場である。

このような分類は，ポパーとアガシの見解から学んだ。相対主義についてアガシは次のように定義している[5]。

> 相対主義：絶対主義の反意語で，異なる時や場所において真理や真なる倫理等は異なるという考え。絶対主義は相対的なものを否定する必要はないが，相対主義は絶対的なものを否定するので，相対主義は絶対主義の否定である。

ポパーは，相対主義と，相対主義と混同されがちだがそれとは決定的に異なる批判主義（相対主義と明確に区別するために造語した私の言葉では相対化主義）とを対比させている。きわめて重要な指摘なので，少し長くなるが，関連個所をすべて引用する[6]。

4　Kiichi Tachibana, Tolerant Rationalism, *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 2000, Vol. 9, No. 5, p. 33 (p. 251).

5　Joseph Agassi, A *Philosopher's Apprentice: In Karl Popper's Workshop*, Rodopi, Amsterdam, 1993, Glossary, p. 251.

6　Karl Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge, London, Golden Jubilee edition 1995 (1945), p.529-530. 傍点引用者。この文章が記されている Addenda (1961) は，残念ながら，未來社の邦訳（1980 年）には掲載されていない。ところが，それ以前に『自由社会の哲学と論敵』という書名で出版された世界思想社の邦訳（1973 年）には掲載されている。私見によれば，この追録は，相対主義を考察するうえで，きわめて貴重な文献だと思われる。この追録の第 14 節のタイトルに，「二つの誤りが二つの正しいものになることはない（Two Wrongs do Not Make Two Rights）」が用いられていることも注目に値しよう。

Akita University

この発見〔あらゆる分野において，自惚れを棄てて批判にたいして心を開くというクセノファネスの発見〕，すなわち批判主義（criticism）に向かうこの第一歩を相対主義（relativism）への第一歩と取り違えないことがもっとも重要でもある。もし二つの派（parties）の意見が異なっている場合，一方か，他方か，あるいは両方ともが誤っていることを意味するかもしれない。これが批判主義者の見解である。相対主義者なら主張するであろう，両方が同様に正しいということを意味しているのではない。必ずしもそうである必要はないけれども，両方が同様に誤っているかもしれない[7]のだ。しかしながら，同様に誤っているということは同様に正しいということを意味すると主張する者は，ただ言葉遊びをしているか，比喩をもてあそんでいるにすぎない。

自己批判的であろうとするのを学ぶこと，他者が正しいかもしれない――自分たち自身よりも正しいかもしれない――と考えてみるのを学ぶことは大きな一歩前進である。だが，次のことには大きな危険性が含まれている。それは，他者と自分たち自身の両方ともが正しいかもしれないと考えるような場合である。しかし，この態度は，われわれには謙虚で自己批判的にみえようとも，われわれがそう考えたくなりそうな程には謙虚でもなければ自己批判的でもない。というのも，自分たち自身と他者の両方ともが誤っていることのほうがもっとありそうだからである。したがって，自己批判は，怠慢の口実や相対主義を採るための口実となるべきではない。また，二つの誤りが一つの正しいものになることなどないのと同様に，一つの論争にたいする二つの誤った派が二つの正しい派になることはない。

この発言から明らかなように，異なる二つの意見が同様に正しいとみなす立場と，同様に誤っているとみなす立場は，外見上は似ているかもしれないが，ポパーは，決定的に異なる立場だとみなしており，ポパーは，前者を「相対主義」，後者を「批判主義」と呼んでいるのだ。先にも述べたように，定義は自由であるが，相対主義にたいする小河原氏の見解とポパーの見解は，明らかに意見が異なっている。私はポパーの見解に賛成であり，しかも，その理由も先に言及した拙稿の引用から理解していただけるものと思う。

しかしながら，小河原氏は，論考の中で，理由を述べてはいない。いつか機会があれば，相対主義にたいするポパーとは異なる氏の見解がポパーの見解より優れているとみなす理由，あるいは，少なくとも，ポパーの見解を採用しない理由を述べていただければと思う。そうすれば，相対主義を巡る二つの見解を，批判主義の立場から[8]，批判的に検討・議論することが可能となり，その結果，実り豊かな成果が生まれるかもしれないからである。

II.

次に，現実に起きた具体的な事例を用いて，相対主義と相対化主義の相違を浮き彫りにしようと思う。

1991 年に勃発した湾岸戦争において，イスラエル政府は，イラクが生物学兵器搭載ミサイルでイスラエルを攻撃してくるのではないかと危惧した。そこで政府は，国民全員に，防毒マスクを無償で支給することにした。NHK のニュースによると，一目で正統派だとわかる，もみあげを伸ばし，ヒゲをたくわえ，黒い帽子と黒いコートを着ているユダヤ教徒の中には，防毒マスクの受け取りを拒否する者がいた。かれらは，記者のインタビューに次のように答えていた。あなたたちは科学を信じて，生物学兵器に備えて防毒マスクを着用するのかもしれないが，われわれは科学ではなく神を信じている。防毒マスクを着用しなくても，神がわれわれを救うつもりなら，われわれは助かるし，神に救うつもりがなければ，防毒マスクを着用したところでわれわれは助からないであろ

7　矛盾する二つの主張すら，両方とも偽である場合がある。論理学でよく用いられる例だが，あの夫は妻を殴るのを止めたのだろうかという問いに対して，殴るのを止めたという主張と殴るのを止めていないという主張は相互に矛盾するので，一方が真であれば他方は自動的に偽になると思いがちである。しかしながら，実際には，もしその夫が妻をこれまで一度も殴ったことがないとすれば，両方の主張がともに偽であることがわかるだろう。両方の主張には，その夫が妻を殴る行為があったことが前提になっているからである。

8　ポパー的な理解に従った，（望ましくない）相対主義の立場を採用すれば，相対主義にたいするポパーの見解と小河原氏の見解は，両方とも同様に正しいということになり，それ以上の進展は不可能になるだろう。他方，ポパー的な批判主義の立場に依拠して，両方とも同様にどこかに誤りがあるかもしれないという批判的態度を採用すれば，両者の困難，問題の発見に努め，修正・改善を行うことによって相対主義にたいする見解をさらによいものにしていける可能性が生まれるだろう。しかも，一般的に言って，批判主義の立場では，何らかの主張が誤っているかもしれないと単純に疑う（懐疑主義）だけでは不十分であり，実際に，その主張の誤りを具体的に指摘することが要請されているのだ。ところが，両方とも同様に誤っているとみなすことも「相対主義」だとする小河原氏の見解では，もし本当に誤りがあった場合でも，誤りが追究されることなくその誤りがそのまま放置されることになってしまうかもしれない。

Akita University

う。したがって，われわれには，防毒マスクは必要ないと[9]。

各人が受けた教育によって得た見解は，通常，当然正しいものと思っているので，それと異なる見解に出会うと，即座にそれを拒否して，無視したり，馬鹿にしたりする傾向を多かれ少なかれわれわれはもっている。先のエピソードに登場する正統派ユダヤ教徒の見解を，科学教育を受けた者なら，即座にそれを拒否するだろう。しかしながら，その逆の判断も可能である。

自分のもっている見解が完璧であるわけはないし，他方，他者の見解も完璧であるはずがないので，どちらについてもそれを絶対化する（absolutize）ことはできないだろう。さらにより良い見解が見つかるかもしれないので，自分とは異なる見解に直面した場合，即断せず，自分の見解と他者のさまざまな見解の理解に努め，それらを比較検討し，相対化することによって，自分の見解を改善し，より良い見解をさらに求めることができるはずである。

出発点（原点）としての自分の見解が少なくとも一つあり，そして自分の見解とは異なる他者の見解は，（自分はたった一人だが，他者は複数いるので）多数あることになる。この事実を自覚することによって，さまざまな見解を多角的な視点から探究できるようになるだろう。こうした探究方法は，相対化主義（ポパーの用語では「批判主義」）に基づいているのであって，相対主義（relativism）とはまったく異なる立場である。先にも述べたが，相対化主義は，より良い見解を求めて，自分の見解も含めた多様な見解を相対化し，誤りが見つかれば，それを修正・改善していこうとする立場であり，他方，相対主義では，相互に異なる見解がそれぞれの社会や文化，歴史においては正しいとみなされるので，修正・改善はなされない。正統派ユダヤ人社会では防毒マスク拒否が正しく，それ以外の一般社会では防毒マスク受容が正しいという見解は，まさに相対主義の立場である。相対主義は，個々のローカルな見解を絶対化する絶対化主義（absolutizationism）でもあり，絶対化せずに相対化（relativize）しようと試みる相対化主義とは正反対の立場であることも明確になったと思われる。

後日談だが，生物学兵器を搭載したミサイルでイスラエルが攻撃されることはなかったが，もし実際に攻撃された場合，イスラエル政府が支給した防毒マスクではその攻撃を防ぐことはできず，使用してもまったく役に立たないことが判明した。使用されていたら，深刻な事態になっていたであろうが，実際に攻撃される，されないにかかわらず，それとは独立に，国民に支給した防毒マスクが生物学兵器に対して有効かどうか，科学者たちによって実際に批判的なテストにかけられたから，役に立たなかったであろうことが判明したのである。すなわち，科学技術に基づいて製造された防毒マスクのほうは，反証可能（テスト可能）なものであり，しかも，実際に反証された。当時（湾岸戦争時）の水準の科学技術に基づく防毒マスクの有効性が相対化されたわけである。したがって，誤りの発見に努め，誤りが発見されれば，その誤りから学ぶという反証主義・批判的合理主義をもっと積極的に採用していれば，防毒マスク製造を支えていた理論は湾岸戦争以前にも修正されていたかもしれないし，また防毒マスク自体も改善されていたかもしれない（その後の展開は寡聞にして知らないが）。むしろ，湾岸戦争という危機的状況に陥る以前には，防毒マスクの生物学兵器に対する有効性の誤りがこれまでのテストで見つかっていない，すなわち，験証されていることに胡坐をかいて，さらなる反証，批判的テストの試みが疎かになっていたのかもしれない。したがって，験証の時点で立ち止まることなく（験証主義），常時さらなる反証の試みを絶えず続けていこうとする態度が求められるのだ（反証主義）。後者のほうが，科学や技術に携わる者の責任ある態度といえるのではなかろうか。

当該のユダヤ教徒の発言に「あなたたちは科学を信じて」いるが，他方，「われわれは科学ではなく神を信じている」という言葉があったが，反証主義的な立場からみれば，それぞれの時点における科学の成果を信じて受容する必要はないので，科学は，神や宗教とは違って，信念・信仰の対象ではまったくないともいえるかもしれない。

他方，宗教者の神に訴える議論のほうはどうであろうか。「われわれは科学ではなく神を信じている。防毒マスクを着用しなくても，神がわれわれを救うつもりなら，われわれは助かるし，神に救うつもりがなければ，防毒マスクを着用したところでわれわれは助からないであろう」という発言であった。この発言はそもそも反証可能ではない。防毒マスクを着用しなかった人が助からず，着用した人がかりに助かった場合でも，そのどちらも神の意志によるものと解釈されてしまうので，防毒マスク

9　日本人の中で，この返答を理解できる人はほとんどいないはずである。仮に理解できたとしても，このような状況に実際に立たされたときに，防毒マスクの受け取りを敢えて拒否する人は皆無ではないかと思われる。しかし，世界の人間の中にはこのような人間が現実に存在しているというのも紛れもない事実である。信念・信仰（belief, faith）について，それに基づいた実践が伴わない場合，本当に信じているとは言えず，信念・信仰とは言えないという見方もあるが，この見方によれば，当該のユダヤ教徒は，まさに確たる信念・信仰を保持しているといえるだろう（その良し悪しは別にしての話だが）。

Akita University

自体の有効性の批判的テストなど行われることはけっしてないだろう。ここが，科学と（このような主張を容認する）宗教の決定的違いであり，前者には反証可能性，テスト可能性，批判可能性があり，したがって，相対化の可能性があるが，後者にはそれらがまったくないのである。世界でありとあらゆるどんな事態が生じようともそれらすべてが神の意志であるならば，神の意志に基づく行為の結果が反証されることはけっしてないからである。

ところが，見方を変えれば，宗教，あるいはむしろ神学は，真正な神（神概念）を求めて，批判的なアプローチを採用してきたとみなすことができるかもしれない（たとえそれが護教論の道具であったとしても）。特に，唯一の神以外は神ではなく，そのような神を信じることは偶像崇拝にほかならないとして退けるような宗教における神学は，当然，多神教の神々を批判・反証しようとするのでまさにそうである。例えば，先ず複数の神を神とみなす多神論の神は「神」と呼ぶに値しない。神人同形説（anthropomorphism）や神人同感情説（anthropopathism）に基づくような神は「神」ではない。一神教の場合でも，神が物質的な性質をもっているとみなすならば，それは「神」ではない，有形的だとみなすならば，それも「神」ではない，もしどこかに欠点や欠陥が見出されるならば，それは神ではない。長い歴史をかけたこのような批判・反証の作業過程の結果，不完全な属性をいっさいもたない完全な神だけが，真正な「神」とされるようになったとみることも可能である（否定神学）[10]。

しかしながら，神学におけるこのような科学と類比的な研究の進め方をポパーは，次のように批判している[11]。

> 最善の宗教は神に関してとても曖昧ですし，しかもうまい具合にそうなっているので，テストしうる感触可能な（tangible）何ものかが存在するなどと主張することはほとんどできません。その存在は，ただ私たちの感情（feelings）に訴えるものです。宗教がテスト可能である限りにおいては，それは偽だと思います。宗教を非難しているわけではありません。宗教は科学ではないのですから。非難は，むしろ，宗教を科学であるかのように扱い続けている神学者たちに対してです。

反証可能性基準による科学と非科学（宗教も含まれる）の境界設定とは別に，ポパーによれば，宗教＝信仰不可欠，科学＝信仰不可欠ではない，という対照図式も成立することになるだろう[12]。むしろ，この後者の観点のほうが，宗教と科学の場合にはその相違が明白になるように思われる。というのも，宗教的教説のなかには，反証可能な言明も少なからず存在するので，前者の反証可能性基準では，科学と非科学（この場合，宗教）の境界設定が不明瞭になってしまうからである[13]。

10　Moses Maimonides, *The Guide of the Perplexed*, translated by Shlomo Pines, University of Chicago Press, Chicago, 1974. 拙稿も参照，立花希一「ポパーの反証主義の背景としてのマイモニデスの否定神学」，『批判的合理主義』，ポパー哲学研究会編，第１巻，基本的諸問題，未來社，2001 年，252-264 ページ。

11　Karl Popper, *After the Open Society Selected Social and Political Writings*, ed. by Jeremy Shearmur & Piers Norris Turner, Routledge, London, 2008, p. 50. 傍点引用者。同書の編者は，編者による注で，この発言が含まれる論文の冒頭に，「神学と信仰の欠如（Theology and Lack of Faith）」という言葉がポパーの手書きで記載されていることに言及している（p. 433）。ポパーのこの言葉は注目に値するが，こうしたポパーの主張のやや詳細な考察については，拙稿参照。立花希一，「ポパーの宗教観再考」，『秋田大学教育文化学部研究紀要』，Vol. 68, 2013 年，103-118 ページ。

12　因みに，ポパーは科学に信仰は不要だと主張するが，科学的営為には不可欠だと思われる理性については，「理性信仰（faith in reason）」の存在を率直に認めている。Karl Popper, *The Open Society*, p. 476. この問題の考察についても，注 11 の拙稿参照。

13　上述の，神概念にたいする批判的アプローチの結果もそれに含まれるが，さらに，このような観点から，ポパーの反証可能性基準による科学と非科学の境界設定に挑戦した論文に次のものがある。Tom Settle, Induction and Probability Unfused, *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by Paul Arthur Schilpp, Open Court, La Salle, Illinois, 1974, pp. 697-749.「この問題〔境界設定問題〕のポパーの解決は有名でとても興味深いのだが満足のいくものではない」とセトゥルは断言し，その理由として，「第一に，誤りを可能な限り除去しようとする目的は科学に特有のものではなく，他の分野でも実践可能であること，第二に，科学理論以外の理論も反証可能である」ことを挙げ，「誤りを可能な限り除去しようとする目的をもって私は神学に取り組んできたが，神学的理論の経験的反駁（*empirical disproof*）を提出できることがわかっている」と述べ，その具体的事例（『旧約聖書』に登場する預言者アモスとイザヤの主張）を提示して，「科学と非科学の境界設定基準として，ポパーの「反証可能性」プラス批判的方針は機能しない」と結論づけている（p. 719）。傍点引用者（但し，「経験的反駁」だけは，傍点原文イタリック）。ポパーはセトゥルの議論を知っていたけれども，かれの結論を認めなかった。Ibid., p. 1118. この両者の主張に関する批判的考察については，別の機会に譲りたいと思う。